

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(20世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enocoのコレクション展)

谷奥 智仁

はじめに

私が今回の展覧会インターンシップに参加したきっかけは、私の大学にある学生支援センターの職員の方からの紹介でした。私の周りの友人がインターン先を決めている中、インターン先の決まっていない私に薦めてくれたのが今回のインターンでした。私が学芸員資格取得のために授業を受けていることを知っていた職員の方が応募してみてもどうかと背中を押され応募し参加させていただきました。今回のインターンに参加することができたのはそんな支援センターの職員さんのおかげでもあり、声をかけていただいたことにも感謝しています。

(1) 展覧会作りについて

・7月2日「開講式」

会場である江之子島文化芸術創造センター(enoco)にてインターン生と学芸員の方との顔合わせがあった。展覧会までの流れ、展覧会の概要が説明され、インターン生は章ごとにグループ分けされた。

・7月29日「中間発表A」

展示内容についての発表が行われた。各章が展示コンセプトやタイトル、会場の図面などを学芸員の方やインターン生の前で発表し、足りない部分や改善点などを見つけることが目的である。この発表までに学芸員の方に展示プランなどを報告し、改善する期間が設けられており、各章そこから改善した内容を発表していたが、それでも改善点や修正点などが指摘されていた。

どの章も作品のできた時代背景を参考にコンセプトを組み立てていた。私が担当した2章のタイトルは「個人のための写真ー戦後を生きた写真家」なのだが、この章は1950年から2000年までの作品で特に国際花と緑の博覧会で展示された作品を中心に扱うことになった。しかし私もパートナーのインターン生も写真にはあまり詳しくなかったのでまずは予め渡されていた作品リストに書かれた作家について調べることになった。作家を調べることは写真作品への考えや、その時代の背景を知ることにもつながると考えたからだった。図書館に行き関連する資料を調べたものを二人で照らし合わせ報告会に向けて準備した。改善期間前に一度内容を見てもらい、修正部分についてのアドバイスをいただいて修正も加えたが、報告会当日に満足できなかった。理由は自分たちの章よりも他の章は作家や作品だけでなく時代背景についてもよくまとめられた内容だったからだ。ある程度の完成度で自分たちが満足してしまったことが大きな問題であり、この日までにあった改善期間を使い、もっと作品や作家、時代背景について理解を深めコンセプトや概要解説をもっと練るべきであった。

・8月8日「中間発表B」

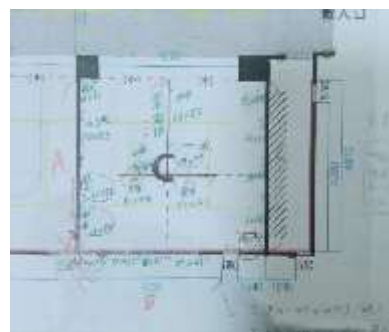
展覧会中に行うイベントの内容決定と各章の展覧会広報物に掲載する作品の決定などが行われた。イベントについては費用以外インターン生が構成を決め、当日もインターン生が講師となって進行するものであった。他のインターンではインターン生でのグループディスカッションや実際の職場を体験することが多いが、実際に自分たちで企画しそこで講師としてイベントに関われることなど減多になく、貴重な体験であった。事前に各インターン生が考えたイベントの発表を行い協議が行われ、その中の一つが実際にイベントとして開催されることになる。

私は「風景を写しとる」というイベントを考えた。普段から生活していると見えないよ

うな部分を、写真で撮るという行為で深く見ることができると考えた事と、会場である enoco 周辺は都会でありながら周りに植物が多く、今回の展覧会の作品にも植物写真が複数あったことを考えて、このイベントを提案した。協議の結果「ピンホールカメラ製作」のイベントを行うことが決定した。開催に向けての段取りや講師を務めるインターン生もピンホールカメラについて知る必要があるため講師を招いての事前学習についても検討した。

決定したイベントの内容は私が提案したものをやることもでき参加者に興味を持ってもらえるものであった。インターン生も参加者も楽しめる内容になっており、自身の視野の狭さを痛感した。私の提案したものはインターン生がいなくてもできてしまうものであったため、参加者だけでなくインターン生もつまらないものになってしまったが、このピンホールカメラ製作では参加者だけでなくインターン生も作業に加わり楽しむことができた。参加者が参加するだけではイベントの意味はなく参加者にどれだけ楽しんでもらいながら興味を持ってもらえるか、講師となるインターン生がどのように関わることができるかまで考える事に欠けていた。今回採用されたイベントの考案者は参加してもらえるようにだけでなくインターン生も参加者も楽しめるように工夫した企画をしていた。私は採用されなかったと思う気持ちよりも、こんな企画を考えてきたなんてすごいと感じる気持ちの方が大きかった。立案者も最初から思いついたわけではなく、自身が今まで学んできたことや経験などからこのイベントを考え企画したのだと考えると、もっと自身の可能性を広げるためにも、多くの経験と考えを持つことが大切である事を改めて実感し、今回のインターンは自分の考えを広げるきっかけにもつながった。

この日以降は章ごとに学芸員の方と連絡を取り合い展覧会に向けての作業がメインとなった。次に全体で集まる機会は11月まではなかった。その間は学芸員の方と章ごとの調整や展覧会で使う解説パネルの原稿執筆や会場のレイアウト作成が主な作業であった。原稿執筆は中間発表で提出した内容から自分たちが分かりにくいと感じた部分を抜き出して作ろうとしたが、7月頃とは違い、自分たちが調べたりしているうちにある程度用語の意味を理解しているため、的外れなものを抜き出してしまったりしていた。学芸員の方とのやり取りの結果で画材や技法に焦点を当てた解説を制作することになった。しかし提出期限ぎりぎりになってしまうことが多くなってしまい学芸員の方には迷惑をかけてしまっていたので、もっと余裕を持ったスケジュールを組み立てるべきであった。



・11月15日「展示パネルの作成」

11月に入ると展覧会に向けての作業が本格化してきた。この日は9月と10月中に執筆した作品解説の原稿をパネルにする作業がメインで機械は使わず手作業で製作するアナログな作業がお昼から始まった。カッターナイフを使った作業だったが大きなものがあり一部のパネルが曲がってしまい、一部のパネルはやり直すことになってしまった。しかし、こんな作業までさせていただく機会には本当はないことであり貴重な経験をさせていただいていた。失敗は多少あったが、その失敗から次はこうすれば失敗しないと学ぶ出来た事は、大きなものであったと認識している。

・11月21日「展示作業」

いよいよ展示作業を行う日となった。インターン生も緊張した面持ちで作業に臨んでおり、当日は朝9時に会場に集合しその日の作業の流れや内容、注意点を確認してから本格的な作業が始まった。事前に提出していたレイアウト案をもとに作品を配置したが、実際に配置すると見栄えの問題などが浮上してきた。この日は美術品を扱う専門スタッフの

方々にインターン生が指示を出して展示作業をしていたのだが、作品の中には大きなものもあり場所の変更で負担をかけてしまった。事前に作品の大きさは伝えられていたが、実際の作品は想像よりも大きかったり小さかったりなどがあった。もっとこちらが大きさやビジュアルについて把握しておくべきであった。それにしても、インターンで展示会のコンセプトやイベント企画、実際の作業をさせていただけるのは珍しく、学生の身でありながら美術作品を見る側でなく展示する側として作業させてもらい、展示会を開催することがこんなにも大変であることもこの作業中に感じたことの一つである。作業は展示だけでなく照明などの作業も行われ、帰る時には外は真っ暗になっていたが帰る時のインターン生の顔はどこか満足そうな顔をしていた。しかし、もっとこうすればよかったのではと感じる部分も多くあり、作業のテンポを上げるなら図面を何度もチェックして変更点を少なくすることを事前しておくべきであった。展示会が始まった2日後、私の学校の教授が授業の一環として会場を訪れてくれた。教授は現役の学芸員で現在京都の博物館で副館長を務める程で、授業の評価も厳しい人だったので、ここはもっとこうしなかったのかなどお叱りを受けると思っていたが、教授は章ごとの構成やパネルの内容も良くできていると評価していただいた。日頃からお世話になっている教授だったので少しでも教授の学びを今回の展示会で発揮できていたのなら教授に恩返しできたと感じた。他のインターン生もそれぞれの関係者から良い評価をもらっていたようで、これからの自信につながるものであった。



・12月17日「作品撤去作業、修了式」

展示作業から約一カ月が経ち展示会も終了を迎えた。多くの方にお越しいただき楽しんでいただいたが、永遠に展示できるわけではなく作品撤去作業が行われた。当日は展示作業と違いインターン生も撤去作業の時に作品に触る機会が多くあった。インターン生の仕事は展示会で展示した作品を保管している博物館ごとに仕分けて箱詰めし作品がちゃんと全部あるかを確認する作業を担当した。作業中は作品が傷つかないように慎重に作業を行ったが指紋などがつかないように軍手などを着用すべきだった。

(2) ワークショップについて

・11月12日「事前講習会」

この日は展示会中に行うイベントの事前講習会が行われた。講師の方をお招きして作り方だけでなく、カメラについての歴史や参加者への接し方などを指導していただき、実際にカメラ製作を行った。製作過程で危ない部分はどうすれば危なくないか、当日参加者はどれくらいの時間を要するかなど細かな部分まで指導していただいた。写真を現像時の注意なども実際に行われ、印画紙と言われる写真紙の扱いが大変であることもここで指導いただいた。印画紙は光を吸収して黒くなるため光を当てすぎると黒いだけになってしまう。私たちの中でも失敗して黒くなってしまった人がいたのだがそれによって失敗した原因や対処法を把握できた。



当日は学芸員の方とインターン生3人が指導する全3日間のプランが立てられたが、後々これが大変なことに気づくのは初回のグループが終わってからであった。

・11月25日「第一回ワークショップ」

イベント初日のこの日の対象は小学生だったのだが私たちは甘く見ていた。自分たちが思っている以上に作業がスムーズに進むのだが、子供たちの興味や関心への移り変わりが激しくコントロールすることが難しかった。昔小学校の先生が何十人もいるクラスをまとめる姿を見たが、それがどれほど難しいことだったかを体験した。私はワークショップをまとめるリーダーを務めたのだが、子供たちをまとめるために必死だったため全体的な流れの制御ができなくなっていたと、イベント終了後の反省会でインターン生の補助でついていた学芸員の方に言われた。しかしイベント自体は怪我もなく終えることができたが、以降のグループのためにも人員の増員とこの日の反省点をまとめたものを共有することになった。

・11月26日「第2回ワークショップ」

翌日のこの日の対象は大人の方がメインだった。大人は子供と違い理論的な説明などを求めてくることがあると講習会の時に言われていたが、そんなこともなく作業自体はスムーズに進んだ。しかしこの日の一番の問題は天気であった。ピンホールカメラは太陽光を使って写真を作るため雲が多いと光を印画紙に集めるまで時間が延びてしまう。この日は雨だったために雲が厚く光が集まるまでに時間がかかってしまった。

この日の反省会では時間がかかる場合に参加者に対してどうすればいいかといったものであった。今回は大人だったためアンケートなどで待ってもらえたが、最終日は小学生が対象のためそうはいかなかった。話し合った結果、小学生は箱のデコレーションをしてもらうことやこちらから会話をもうけることが一番ということになった。

・12月10日「第3回ワークショップ」

期間が少しあいて最終グループのワークショップの日がきた。この日は初日と同じで小学生が対象であったが、事前におこなっていた情報共有と人員補充によって初日ほど慌てることなくスムーズな進行が行えた。またこの日は少し天候が悪かったのだが第2回の情報でこちらの対処も慌てずにおこなうことができ最終日は大きな問題もなく終了することができた。保護者の方のアンケートにも良かったなどのコメントを多くいただいた。

全体を通して参加した人たちは帰る時にありがとうと声をかけて帰られていった。自分たちの企画したイベントで誰かが楽しんでくれたという経験は、今後何かを企画するにあたっての自信につながるものである。

(3) 研修全体を通じた振り返り

今回のインターン参加は就職活動においては特別な経験をしてきたとして、就職後においては資料作成と企画書作成に役立てられると考えている。就職活動ではインターンはどんなことをしてきたのか聞く企業もある。今回のような長期間インターンの話は興味深いものとして聞いてもらえると考えられる。就職後は今回のインターンでも何度もしてきた展覧会のコンセプト作成時の資料収集の経験をいかせること、また、企画を考える場合は相手のことを考えて作成することができると思う。今回のインターンは最初の方は皆緊張して自身の章のグループのみで会話していたが、最終日の頃にはみんな話せていた。今回のインターンはそれ自体の経験も大きい、それに加えて自分とは違う学校に通っている人間と関わることができるものであった。他のインターンでも同じことはできると思うが、今回の展覧会構成に関しては自分の担当だけでなく周りの章のインターン生や学芸員の方との連携も大事であった。私がこの展覧会で一番に感じたことは組織の関わり合いが大きいことである。その理由として展覧会は作品を持っている博物館や美術館が単体ですとを考えていたがそうではなく、広告をデザインする会社があり、作品を運ぶ人々があり、その作品の著作権を処理する人がいるなど様々な人々が集まることで完成されていく。どこかひとつが足りないと完成しないパズルの中に学生であるインターン生が一部として関わることができたことは貴重な体験であり業界研究の一環として学芸員だけでなく

様々な方法で美術に関わることができることを知る機会でもあった。今回の展覧会はそれぞれのインターン生が大きな経験として就職活動や他のインターン、また就職後の仕事などで活用され応用につなげていくと思っている。私も今回の展覧会で少しではあるが資料収集のコツなどがつかめたと感じており、この能力を卒業論文や就職活動での業界研究のための資料収集に役立てていき、就職後にも活用できるようにスキルアップも目指したいと考えている。